

蜜柑

芥川龍之介



或曇あるつた冬の日暮である。私は横須賀発上り二等客車の隅すみに腰を下して、ぼんやり発車の笛を待っていた。とうに電燈のついた客車の中には、珍らしく私の外に一人も乗客はいなかつた。外を覗のぞくと、うす暗いプラットフォオムにも、今日は珍しく見送りの人影さえ跡を絶つて、唯ただ、檻おりに入れられた小犬が一匹、時々悲しそうに、吠ほえ立てていた。これらはその時の私の心もちと、不思議な位似つかわしい景色だった。私の頭の中には云いようなのない疲労と倦怠けんたいとが、まるで雪曇りの空のようなどんよりした影を落していた。私は外套がいとうのポケットトへじつと両手をつつこんだまま、そこにはいつている夕刊を出して見ようと云う元気さえ起らなかつた。

が、やがて発車の笛が鳴った。私はかすかな心の寛くつろぎを感じながら、後うしろの窓枠まどわくへ頭をもたせて、眼の前の停車場がずる

ずると後ずさりを始めるのを待つともなく待ちかまえていた。ところがそれよりも先にけたたましい日ひ和下よりげ駄の音が、改札口の方から聞え出したと思うと、間もなく車掌の何か云のい罵のしる声と共に、私の乗っている二等室の戸ががらりと開いて、十三四の小娘が一人、慌あわただしく中へはいって来た、と同時に一つずしりと揺れて、徐おもむろに汽車は動き出した。一本ずつ眼をくぎって行くプラットフォオムの柱、置き忘れたような運水車、それから車内の誰かに祝儀の礼を云っている赤帽——そう云うすべては、窓へ吹きつける煤煙ばいえんの中に、未練がましく後うしろへ倒れて行つた。私は漸ようやくほつとした心もちになつて、巻煙草まきたばこに火をつけながら、始めてせめて懶まい睡なをあげて、前の席に腰を下していた小娘の顔を一瞥べつした。

それは油気のない髪をひつつめの銀杏いちようがえ返しに結つて、横な

での痕あとのある鞆ひびだらけの両頬ほおを氣持の悪い程赤く火照ほてらせた、
如何いかにも田舎者いなかもらしい娘むすめだった。しかも垢あかじみた萌黄色もえぎいろの毛
糸えりまきの襟巻えりまきがだらりと垂れ下つた膝ひざの上には、大きな風呂敷包
みがあった。その又包みを抱いた霜焼けの手の中には、三等
の赤切符が大事そうにしつかり握にぎられていた。私はこの小娘
の下品な顔だちを好まなかつた。それから彼女の服装が不潔
なのもやはり不快だった。最後にその二等と三等との区別さ
えも弁わきまえない愚鈍な心が腹立たしかつた。だから巻煙草に火
をつけた私は、一つにはこの小娘の存在を忘れたいと云う心
もちもあつて、今度はポケットの夕刊を漫然と膝の上へひ
ろげて見た。するとその時夕刊の紙面に落ちていた外光が、
突然電燈の光に變つて、刷すりの悪い何欄かの活字が意外な位鮮あざやか
に私の眼の前へ浮んで来た。云うまでもなく汽車は今、横須

トシネル
賀線に多い隧道の最初のそれへはいったのである。

しかしその電燈の光に照らされた夕刊の紙面を見渡しても、やはり私の憂鬱ゆううつを慰むべく、世間は余りに平凡な出来事ばかりで持ち切っていた。講和問題、新婦新郎とくしよぐ、流職事件、死亡広告——私は隧道へはいった一瞬間、汽車の走っている方向が逆になったような錯覚を感じながら、それらの索漠さくぼくとした記事から記事へ殆ほとんど機械的に眼を通した。が、その間も勿論もちろんあの小娘が、あたかも卑俗な現実を人間にしたような面持ちおもてで、私の前に坐っている事を絶えず意識せずにはいられなかった。この隧道の中の汽車と、この田舎者の小娘と、そうして又この平凡な記事に埋うづまっている夕刊と、——これが象徴でなくて何であろう。不可解な、下等な、退屈な人生の象徴でなくて何であろう。私は一切がくだらなくなつて、読みかけた夕刊

を抛り出すと、又窓枠に頭を寄せながら、死んだように眼をつぶつて、うつらうつらし始めた。

それから幾分か過ぎた後であった。ふと何かに脅されたよ
うな心もちがして、思わずあたりを見まわすと、何時の間にか例の小娘が、向う側から席を私の隣へ移して、頻に窓を開けようとしている。が、重い硝子戸は中々思うようにあがらないらしい。あの鞆だらけの頬は愈赤くなって、時々鼻涙をすすりこむ音が、小さな息の切れる声と一しよに、せわしなく耳へはいつて来る。これは勿論私にも、幾分ながら同情を惹くに足るものには相違なかつた。しかし汽車が今將に隧道の口へさしかかろうとしている事は、暮色の中に枯草ばかり明い両側の山腹が、間近く窓側に迫つて来たのでも、すぐに合点の行く事であつた。にも関らずこの小娘は、わざわざし

めてある窓の戸を下そうとする、——その理由が私には呑みこめなかつた。いや、それが私には、単にこの小娘の気まぐれだとか考えられなかつた。だから私は腹の底に依然として険しい感情を蓄えながら、あの霜焼けの手が硝子戸を擡げようとして悪戦苦闘する容子を、まるでそれが永久に成功しない事でも祈るような冷酷な眼で眺めていた。すると間もなく凄じい音をはためかせて、汽車が隧道へなだれこむと同時に、小娘の開けようとした硝子戸は、とうとうぱたりと下へ落ちた。そうしてその四角な穴の中から、煤を溶したようなどす黒い空気が、俄に息苦しい煙になって、濛々と車内へ漲り出した。元来咽喉を害していた私は、手巾を顔に当てる暇さえなく、この煙を満面に浴びせられたおかげで、殆息もつけない程咳きこまなければならなかつた。が、小娘は私に

頓着する気色も見えず、窓から外へ首をのぼして、闇を吹く風^{とんじやく}に銀杏返しの鬢^{けしき}の毛を戦^{びん}がせながら、じつと汽車の進む方向を見やっている。その姿を煤煙と電燈の光との中に眺めた時、もう窓の外が見る見る明くなって、そこから土の匂^{におい}や枯草の匂^{ひやく}や水の匂^{ひやく}が冷かに流れこんで来なかつたなら、漸^{ようやく}咳きやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしに叱りつけてでも、又元の通り窓の戸をしめさせたのに相違なかつたのである。

しかし汽車はその時分には、もう安々と隧道^{すべ}を迂^{まわ}りぬけて、枯草の山と山との間に挟^{はさ}まれた、或貧しい町はずれの踏切りに通りかかっていた。踏切りの近くには、いずれも見すばらしい藁^{わら}屋根^{やね}や瓦^{かわら}屋根^ががごみごみと狭苦しく建てこんで、踏切り番が振るのであろう、唯一^{いちりゆう}旒^うのうす白い旗^{もの}が懶^{なま}げに暮色を

揺つていた。やつと隧道を出たと思う——その時その蕭索と
した踏切りの柵の向うに、私は頬の赤い三人の男の子が、目
白押しに並んで立っているのを見た。彼等は皆、この曇天に
押しすくめられたかと思う程、揃つて背が低かつた。そうし
て又この町はずれの陰惨たる風物と同じような色の着物を着
ていた。それが汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一斉に手を挙
げるが早いか、いたいけな喉を高く反らせて、何とも意味の
分らない喊声を一生懸命に迸らせた。するとその瞬間である。
窓から半身を乗り出していた例の娘が、あの霜焼けの手をつ
とのばして、勢よく左右に振つたと思うと、忽ち心を躍らす
ばかり暖な日の色に染まつている蜜柑が凡そ五つ六つ、汽車
を見送つた子供たちの上へばらばらと空から降つて来た。私
は思わず息を呑んだ。そうして刹那に一切を了解した。小娘

は、恐らくはこれから奉公先へ赴おもむこうとしている小娘は、その懐ふところに蔵かくしていた幾顆いくかの蜜柑を窓から投げて、わざわざ踏切りまで見送りに来た弟たちの労に報いたのである。

暮色を帯びた町はずれの踏切りと、小鳥のように声を挙げた三人の子供たちと、そうしてその上に乱落らんらくする鮮あざやかな蜜柑の色と——すべては汽車の窓の外に、瞬またたく暇もなく通り過ぎた。が、私の心の上には、切ない程はつきりと、この光景が焼きつけられた。そうしてそこから、或得体の知れない朗ほがらかな心もちが湧わき上つて来るのを意識した。私は昂然こうぜんと頭を挙げて、まるで別人を見るようにあの小娘を注視した。小娘は何時かもう私の前の席に返って、相不変あいかわらずひびだらけの頬を萌黄色の毛糸の襟巻に埋めながら、大きな風呂敷包みを抱かかえた手に、しっかりと三等切符を握にぎっている。………

私はこの時始めて、云いようのない疲労と倦怠とを、そうして又不可解な、下等な、退屈な人生を僅わずかに忘れる事が出来たのである。

蜜柑

底本：「蜘蛛の糸・杜子春」新潮文庫、新潮社
1968（昭和 43）年 11 月 15 日発行
1988（平成元）年 5 月 30 日 46 刷

入力：蔣龍

校正：noriko saito

2005 年 1 月 7 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。